



# THE MASK OF ANARCHY

KROPOTKIN LIGHTHOUSE  
PUBLICATION  
PUBLISHED BY  
JIM HUGGON

THIRD EDITION

PERCY BYSSHE SHELLEY

日本シェリー研究センター 第22回大会

日時：平成25年(2013年)12月1日(日)12時40分受付開始

場所：東京大学 本郷キャンパス 山上会館

第22回大会

日時：平成25年(2013年)12月1日(日)12時40分受付開始  
場所：東京大学 本郷キャンパス 山上会館 2階 大会議室

プログラム

1. 13:00 開会の辞 上野 和廣
2. 13:05 特別講演 上野 和廣

「理想と現実の間で」

3. 14:20 日本シェリー研究センター シンポジウム

“*The Mask of Anarchy*”

司会 藤田 幸広

パネリスト -I 望月 健一

「道義心の眠れる番犬—政治的風刺詩としての『無秩序の仮面』と『暴君スウェルフット』」

パネリスト -II 櫻井 和美

「シェリーのフェミニズム——  
『無秩序の仮面』を中心に——」

レスポンス 藤田 幸広

『無秩序の仮面』は“popular song”か」

4. 16:30 年次総会  
昨年度分会計報告・その他

17:30より山上会館地下1階会議室001にて懇親会(会費4,000円)を開きます。是非ご参加ください。

事務局からのご連絡

今年度分(2013年)の会費未納の方は受付にてお支払いください。  
会場使用料の一部負担金として、参加者お一人500円を頂戴いたします。

特別講演

理想と現実の間で

上野 和廣

私が40年ほど前にシェリーを知ってからの研究を振り返り、皆さんの参考になればと思い、お話しいたします。大学生の頃、英文学史の講義などを通じて、シェリーが理想主義的な抒情詩人で、「冬来たりなば、春遠からじ」が彼の詩の一節であるとか、19世紀に'a beautiful and ineffectual angel, beating in the void his luminous wings in vain'と言ったマシュー・アーノルドの言葉が、20世紀になってもシェリー観に大きな影響を与えているとか、イートン校時代は'mad Shelley'と呼ばれていたとかの断片的知識はありました。

私が研究対象として興味を持ったのは、'The desire of the moth for the star'に代表されるシェリーの理想を追い求める姿勢です。決して手に入れることができないと分かっている、なぜ理想を追い求めようとするのか。その理由を知りたいと思ったことが始まりです。私は学生運動が下火になった頃の三無主義とか四無主義とか言われた「しらけ世代」の若者でした。そんな私から見ると、シェリーは眩しすぎて近寄りたがい存在でした。しかし、調べるうちに、シェリーが生きた時代の雰囲気、私の生きる時代の雰囲気によく似ていると思うようになりました。フランス革命の熱気が冷めた時代をシェリーは生き、学生運動の熱気が冷めた時代を自分は生きている。挫折感漂う冷めた雰囲気という点で共通していると思ったのです。ところが、シェリーは熱く生き、私はしらけている。この違いはどこに原因があるのか。これが最初の研究テーマとなりました。たどり着いた答えは、'To live, as if to love and live were one'という一行でした。私の解釈としては、生きるために愛し、愛するために生きる、この二つは表裏一体で、分かちることができない。従って、生きるためには何かを愛さなければならず、愛することを止めたらそれは死を意味する。だからシェリーは愛の理想を求めて生き続けるしかなく、熱いのだ。これが私の結論でした。

その後、シェリーにとっての愛の理想と現実について具体的に調べるのが私の研究テーマとなりました。私が興味を持ったのは、シェリーが二十歳前後のころ目指していた「理神論的仲間」(a deistical coterie)作りでした。これは、コールリッジたちのバンティソクラシー計画に似ていますが、博愛や人類愛の精神で結ばれた善良で、無私で、自由な者の集まりとなるはずでした。この仲間作りには、妹のエリザベスやヘレン、二人のハリエット、ホッグやヒッチナー、ゴドウィン家の人々も巻き込まれました。しかし、理想とする理性的な愛に基づいた「理神論的仲間」の実現に至ることはなく、ホッグやヒッチナーとの不和、ハリエット・シェリーの悲劇をもたらすことになりました。愛の理想と現実の一つだと思えます。

シェリーはメアリーと出会って、時には抑えがたい'a violent and lasting passion'に振り回されるのが人間であることに気づき、理性の力を信じすぎていたことを反省し、想像力重視へと方向転換します。哲学的な詩『クイーン・マブ』から抒情詩劇『鎖を解かれたプロメテウス』への変化は、ここに原因があると私は考えます。さらに、ハリエットの自殺は、博愛や人類愛の精神を広めることが使命だと思っていたシェリー

一を絶望のどん底に突き落とし、心に深い傷を残しました。この傷がその後のシェリーの詩の通奏低音になっていったと思います。以上のような私の解釈をもう少し具体的にお話したいと思います。

(うえの・かずひろ：神戸女子短期大学)

## 第22回大会 シンポジウム

### “The Mask of Anarchy”

#### 『無秩序の仮面』は“popular song”か

司会・レスポンス

藤田 幸広

今回のシンポジウムは、シェリーが「イタリアで寝ているときに」イギリスで起こった「ピータールーの虐殺」(Peterloo Massacre)を発端として書かれた『無秩序の仮面』を取り上げる。この詩は、その政治色の強さゆえに、シェリーの他の詩と違う運命をたどって受容されてきた。インドの独立を目指したガンディーが称賛したといわれる『無秩序の仮面』は、多くの研究者が論文の中で引用しているリチャード・ホームズの「これまで英語で書かれた物の中で最も偉大な政治的プロテストの詩」という言葉によって簡潔に表現されている。しかし、シェリーの多くの詩がそうであるように、『無秩序の仮面』は様々な視点から読むことができる。

最初のパネリスト望月健一氏は、政治的風刺詩という視点からイギリスの摂政時代を背景とする『無秩序の仮面』と『暴君スウェルフット』を比較考察する。櫻井和美氏は、詩の中に登場する女性「希望」の役割を出発点として、メアリー・ウルストンクラフトのフェミニズムと比較しながらシェリーが独自に作り上げたフェミニズムについて検討する。

私自身としては、『無秩序の仮面』は“popular song”(民衆のための歌)か、という疑問を投げかけながら、作品の流れに沿ってテキストを概観する。とくに、仮面たちがする「凱旋」(triumph)のイメージ、「一つの姿」が生まれる場面、そして諸説ある演説の声の主は誰か、という点に注目し、フロアの方々と爽りある議論を交わしたい。

レスポンスという大役に対して、若輩者の私がどの程度その役割を果たせるか疑問である。しかし、パネリストのお二人が取り上げたテーマについて何らかのかたちでコミットさせて頂き、フロアとの架け橋になればと思っている。また、これを機にフロアの方々にも『無秩序の仮面』と改めて向き合ってもらい、様々な視点から質問や意見を出して頂ければ、シンポジウムが盛り上がることを切望している私としてはこれ以上のことはない。

(ふじた・ゆきひろ：流通経済大学)

## 道義心の眠れる番犬— 政治的風刺詩としての『無秩序の仮面』と『暴君スウェルフット』

パネリストI 望月 健一

パーシー・シェリーの詩には専制君主に対する憎悪心や、他の作家、思想家に対する批判精神があらわれているものが多いが、このことは、この詩人が決して風刺精神とは無縁ではないことを裏付けるものである。彼の風刺の大きな特徴は、「嘲笑する」ばかりではなく、道義心や善悪の観念と切っても切れない関係にある点である。例えば、パーシーの初期の断片詩 ‘Fragment: Satire on Satire’ には、“If Satire’s [scourge] could awake the slumbering hounds / Of Conscience, . . .” という一節があり、彼が風刺を単に「嘲笑する」(“ridicule”) だけのものではなく、「道義心」(“Conscience”) と切っても切れない関係にあるものと捉えていたことがうかがえる。

ステイヴン・スペンダーは、パーシーの詩を五つのカテゴリーに分類し、風刺詩の項目で *Peter Bell the Third*, *The Mask of Anarchy*, *Oedipus Tyrannus*; *Swellfoot the Tyrant* の三篇を扱っている。詩人ワーズワスと当時のイギリス社会をコミカルに笑い飛ばした *Peter Bell the Third* は別として、後二者は専制政治に対する激しい憎悪心、実在人物の辛らつな戯画化、民衆及び扇動者に対する詩人の微妙なスタンスなど、多くの類似点をもつ。しかし、*The Mask of Anarchy* と *Oedipus Tyrannus* では、詩形、作風、詩人の語り口など、かなりの相違点があることも事実である。例えば、前者の後半において、詩人が直接民衆に向けて発する非暴力的不服従のメッセージが神託のごとき力強さをもつものに対して、後者の第二幕において詩人の代弁者として登場する「自由」は、民衆を扇動する「飢餓」に対して和解を呼びかけるが、その試みは失敗する。

本発表では、1819年、ピータールー虐殺事件のニュースを知ったパーシーが憤激のあまり一気に書き上げた *The Mask of Anarchy* と、そのおよそ1年後に、フェアで売るために連れて来られた豚達の鳴き声にヒントを得て書かれたとされる *Oedipus Tyrannus* の比較考察を行うことによって、彼の作品の中でも特異な位置を占める、これらの政治的風刺詩の特質を浮き彫りにしていきたい。

(もちづき・けんいち : 富山短期大学)

## シェリーのフェミニズム— 『無秩序の仮面』を中心に—

パネリストII 櫻井 和美

シェリーの作品には多くの魅力的な女性が登場する。彼女たちは、時に主人公として、時に主人公を救うキー・パーソンとしての役割を持っている。彼女たちを女性という視点から考えるときに重要な人物が、メアリー・ウルストクラフトである。現代のジェンダー研究では、彼女はフェミニズムの祖と仰がれているが、シェリーにとっては義母にあたる人物である。シェリーとメアリーの結婚を含め、「理想美」、『イスラムの反乱』の「女性の姿」(“female forms”) といった作品上の表現には、ウルストクラフトからの思想的影響が指摘されている。また今回取り上げる『無秩序の仮面』においては、執筆前後の時期に、シェリー一家はメイソン夫人と交流している。彼女は幼少期にウルストクラフトの生徒であった女性で、“Mrs. Mason” という名前自体が、ウルストクラフトの『実生活実話集』に登場するウルストクラフト自身を表わす家庭教師の名前であり、メイソン夫人は明らかにウルストクラフト的な政治的見解を持つ女性だった。

『無秩序の仮面』でのキー・パーソンは「希望」と考えられる。全92連の詩の内容は、2部に大別できる。第1部(1-33連)は、詩人が夢で見た仮装行列の詳細から始まり、その行列と王なる「無秩序」が死ぬ場面で終わる。第2部(34-92連)は、「一つの姿」が自由をテーマに行う独演である。構成的には、悪の象徴である仮装行列と王なる「無秩序」の詳細が詩全体のほぼ3分の1を占めているが、そこに突如現れた「希望」という名の乙女と、「一つの姿」の出現だけで、悪の象徴はわずか1連だけの説明で減んでしまう。「希望」の登場は明らかに詩の転機となっていて、この詩もまたヒロインの姿を扱った作品の一つだと考えられる。

シェリーの交友関係や思想背景から判断すると、シェリーの思想にはウルストクラフトの影響が反映されている。発表では、フェミニストとしてのシェリーの一面を知るために、まず、「希望」に見出せるシェリーの理想とする女性像と、ウルストクラフトの理想とする女性像に注目する。次に、「らしさ」という点に注目し、ウルストクラフトからの影響と独自性を考察することによって、シェリーのフェミニズムが時代の先駆けとなる要素を持っていたことを見ていこうと思う。

(さくらい・かずみ : 佛教大学)